緊迫のベラルーシ情勢

# ルカシェンコ大統領の命運握るロシアとの「連合国家」

**大統領選挙をめぐり混乱続くベラルーシ。追い詰められたルカシェンコ大統領は、ロシアの後ろ盾を期待するが、プーチン大統領からは両国の「連合国家」化を求められる。それはベラルーシの国家主権を揺るがす事態となりうる。**

今年六月、ロシアのルジェフで談笑するルカシェンコ大統領（右）とプーチン大統領（SPUTNIK／時事通信フォト）

ロシアNIS経済研究所所長
**服部倫卓**
はっとり　みちたか　北海道大学大学院文学研究科博士後期課程修了（学術博士）。在ベラルーシ大使館専門調査員などを経て現職。著書に『不思議の国ベラルーシ　ナショナリズムから遠く離れて』、共編著に『ベラルーシを知るための50章』など。

東ヨーロッパのベラルーシで、八月九日に投票が行われた大統領選後、混乱が続いている。この国では、一九九四年七月に就任したルカシェンコ大統領が、四半世紀に及ぶ長期政権を築いてきた。今回の選挙で、ルカシェンコは実に六選を目指していた。投票終了後に中央選管は、ルカシェンコが八〇％以上を得票し大幅リードと発表する（最終的な得票率は八〇・一％と発表された）。しかし、大がかりな不正があったとして、首都ミンスクなどで市民が一斉に抗議に立ち上がった。

## 「欧州最後の独裁者」の治める国

ベラルーシはかつてソ連邦を構成していた一五共和国の一つであった。一九九一年暮れのソ連邦解体に伴い、歴史上初めての独立を果たした。人口は九五〇万人ほどで、首都はミンスク市。ベラルーシ人はロシア人・ウクライナ人と同じ東スラヴ系の民族であり、文化・言語・宗教などの

面でロシアの影響が大きい。

現在までのところ、ベラルーシ国民はたった一人の大統領しか知らない。それが「欧州最後の独裁者」ことアレクサンドル・ルカシェンコである。ルカシェンコは一九五四年生まれで、ソ連時代はソフホーズ（国営農場）支配人などとして働いた。ソ連末期の九〇年、ベラルーシ共和国議会選挙で当選すると、九三年に政府高官の汚職を追及する特別委員会の長に就任し、脚光を浴びた。九四年の大統領選で国民は、経済・生活の改善やロシアとの統合を大衆迎合的に唱えるルカシェンコ候補を選択したのである。

大統領に就任したルカシェンコは、九五年の国民投票でロシアとの経済統合への同意を国民から取り付け、ロシア語をベラルーシ語と並ぶ国家言語に格上げし、国旗・国章もソビエト風のデザインへと変更した（今日の民主化運動で多くの参加者により掲げられている白赤白の旗は、この時に廃止されたもの）。さらに、九六年の国民投票により、大統領権限を強化する憲法改定を強行した。

## 長期政権の秘訣はロシアとの「特別な関係」

その強権的な手法に、国際社会からは批判を浴びながらも、ルカシェンコは二〇〇一年、〇六年、一〇年、一五年と再選を重ねてきた。他方、民主化を望む市民は趨勢として増えており、〇六年、一〇年には大統領選後に不正を批判する民主派と治安部隊が衝突する事件も起きている。それでも、農村、高齢者、公務員、国営企業労働者、そして軍事・治安関係者などの基礎票に支えられ、ルカシェンコ政権の岩盤は強固であった。当局は、最小限の力の行使で、民主化運動を抑え込むことができた。

ルカシェンコが標榜してきたのが、「社会的志向の市場経済」である。国家の役割を重視し、無条件な市場経済化は拒むという姿勢だ。大企業の民営化には手を付けず、いまだに「五ヵ年計画」すらある。端的に言えば、ソ連時代の社会主義経済の焼き直しに他ならない。

ベラルーシが時代遅れの経済運営を続けられたのは、ロシアとの「特別な関係」から最大限の利益を引き出したからだった。ロシアと関税同盟を結成し、ロシア市場に輸出攻勢をかけた。それのみならず、ベラルーシはロシアから有利な条件で天然ガスや石油を輸入でき、その他のさまざまな措置を合計すると、年間一〇〇億ドルとも言われる実質的支援をロシアから供与されてきた。経済的な観点から言えば、ベラルーシはロシアのパラサイト国家に他ならなかった。

もちろん、ロシアとしては、何の見返りもなしに、ベラルーシを支援したくはない。だが、狡猾なルカシェンコは、肝心の国家統合、経済統合には真面目に応じようとしなかった。ロシア側が苛立ちを募らせ、圧迫を加えたことも一度ならずあった。しかし、ルカシェンコ体制が崩壊すれば、ベラルーシで親欧米派の民主政権が成立する可能性がある。その点、「欧州最後の独裁者」は、欧米との接近に限界があり、ベラルーシがロシア圏にとどまる担保となる。こうして、ロシアはルカシェンコ体制を支え続けてきたのである。

## 二〇二〇年に入ってからの情勢変化

ベラルーシの南に位置するウクライナは、二〇一三年終盤から一四年にかけて、大激動に見舞われた。実はウクライナ危機はルカシェンコにとっての追い風となり、一五年の大統領選でルカシェンコはたやすく五選を遂げることができた。そして、昨年くらいまでは、ルカシェンコは二〇年の選挙も余裕で乗り切り、六選を果たすのではないかという見方が有力であった。しかし、今年に入ってからの情勢変化で雲行きが変わり始める。

中でも影響が大きかったのが、新型コロナウイルスのパンデミックだ。ルカシェンコは「コロナなど恐るるに足らず」という態度をとり、ベラルーシは周辺国のような厳格な措置を打ち出さなかった。ルカシェンコはこれまで、「我が国においては国の強力な指導により安定・秩序が常に保たれる」という神話を作り上げてきた。今回もその神話にこだわり、「ウォッカを飲めば感染などしない」といった放言を繰り返していた。ところが現実には、国の無策により感染は拡大の一途を辿り、最終的には大統領本人もウイルスに罹患した。こうして、民心はルカシェンコから急激に離れたわけである。

ベラルーシ大統領選では、体制側は危険な対抗馬となりうる人物の候補者登録は認めないのが通例である。今回の選挙でも、ババリコ、ツェプカロ、チハノフスキーといった有力な人物は出馬自体が阻まれた。そこで、夫の代わりに立候補し、結果的に野党統一候補の役回りを果たすことになるのが、チハノフスカヤという女性だった。ルカシェンコ陣営は、「素人の主婦にはどうせ何もできない」と見下していたのだろう。

しかし、現実にはチハノフスカヤ候補は強力な求心力を発揮し、地方遊説には多くの群衆が詰めかけた。その選挙戦略は、きわめてユニークなものだった。「自分が大統領

選に勝利したあかつきには、いま獄中にいる夫たちを解放し、半年以内に今度は正式な大統領選挙を実施する」という一点に、主張を絞ったのである。あくまでも、ルカシェンコ政権が国民の多数派から支持されていないことを明らかにするための、便宜的な受け皿に徹する姿勢だったのだ。

蓋を開けてみると、案の定、政権側による投票・開票の不正が明らかになってゆく。中央選管は、開き直ったかのように、ルカシェンコが八〇％以上を得票し大幅リードと発表（最終的には八〇・一％と発表される）。市民が選挙不正に抗議の声を上げると、治安当局により容赦なく弾圧された。デモ参加者はもちろん、何もしていない通行人までが殴打・逮捕される光景を目の当たりにして、市民たちはいよいよルカシェンコ体制の何たるかを悟ることとなる。

事ここに至って、国民にとってルカシェンコはもはや合法的な大統領ではなく、単に暴力装置を駆使して最高指導者の地位にしがみついているだけの存在になったわけである。大都市住民や若者だけでなく、国営大企業の労働者たちまでもが反ルカシェンコを掲げてストに突入する現象が見られた。そうした労働者は、どちらかと言えばルカシェンコ経済路線の受益者であり、それだけ今日のベラルーシでは、個別の利害を超えてルカシェンコへの反発が広範な社会層に広がっていることを物語っている。

## 「連合国家」構想を復活させたロシアの危機感

反ルカシェンコ運動の勢いに押され、一時は崩壊目前かと思われたルカシェンコ政権だったが、態勢を立て直し、巻き返しに転じている。民主派は週末ごとに大規模デモを繰り返しているものの、ルカシェンコは梃子でも動かない様子だ。本稿を執筆している九月一五日の時点では、事態はあまりに流動的であり、予断を許さない。

ただ、ロシアの出方が今後の情勢を左右するという点で、衆目は一致している。九月一四日にルカシェンコ大統領がロシアを訪問し、プーチン・ロシア大統領との直接交渉に臨んだことは、大きな注目を浴びた。

今回の首脳会談での協議も含め、ロシアとベラルーシの関係で焦点となっているのが、二国間統合の枠組みである「連合国家」だ。一九九九年一二月八日に、当時のエリツィン大統領とルカシェンコ大統領が調印した条約にもとづくものである。ただ、この条約はいきさつが複雑なので、以下で解説を試みたい。

思い起こしてみれば、九〇年代にロシアの体制派エリートたちは、病弱で支持率も低いエリツィンの政権を支える

のに、四苦八苦していた。当時クレムリンでは、ベラルーシとの国家統合をエリツィン政権の延命に利用するという案も検討されたという。対するルカシェンコの側にも、ロシア・ベラルーシの統一国家をつくり、自らがクレムリンの玉座に収まりたいという野望があった。こうして、双方の政治的思惑が交錯し、両国は当初かなり本格的な国家統合条約を起草しようとした。

しかし、一九九九年八月にプーチンがロシア首相に就任し、頼りがいのあるエリツィンの後継者が登場したことで、状況が一変した。ロシア側はむしろ、自国の国家体制を不安定化させかねない対ベラルーシ統合にブレーキをかけ、条約案を骨抜きにした。その作業の陣頭指揮をとったのが、プーチン首相に他ならなかった。結局、連合国家条約は予定どおり九九年暮れに調印はされたものの、国家統合文書としては空文の羅列となったのである。

それ以降つい最近まで、連合国家が話題に上ることは、多くはなかった。ロシア自身、ユーラシア経済連合などの多国間統合に注力していた。そうした中、二〇一八年暮れになって、ロシア政府は突如として、連合国家条約の厳格な履行をベラルーシに迫り始めた。これは、ベラルーシにロシアへの編入を迫る「最後通牒」だとして、物議を醸した。

プーチンが直々に封印したはずの連合国家が、なぜ今頃になって復活したのか。やはり、この二〇年間の国際環境の変化が大きいと考えられる。欧州連合（ＥＵ）および北大西洋条約機構（ＮＡＴＯ）が東方に拡大し、ＥＵは旧ソ連の近隣諸国を対象とした「東方パートナーシップ」政策を展開し、その文脈で一四年のウクライナ政変も発生した。

ロシアとしては、「これ以上、自分たちの勢力圏が掘り崩され、ＮＡＴＯがロシアのすぐ西隣にまで迫るような事態は何としても阻止しなければならない」という認識に至ったのであろう。そこで、二〇年前にはあえて死産とした連合国家に、新たに命を吹き込んで、ロシアにとっての「核心的利益」であるベラルーシをロシア圏に固定するために活用しようとしたと見られる。

ただし、一九九九年の条約は空文の羅列だったので、このままでは実効性が低い。そこでロシアは、統合を深化させるための具体的な「工程表」を策定すべく、ベラルーシ側に迫る。二〇一九年一二月八日に、連合国家創設条約の調印から二〇年の節目を迎えることから、両国はこの記念日に、統合を深化させるための工程表に調印することとなった。しかし、いくつかの項目につき合意が得られず、結局のところ工程表への調印は見送られたという経緯がある。

## ベラルーシはロシアの「保護国」へと後退？

従来ルカシェンコは、ベラルーシの主権を一部でもロシアに引き渡すことには、頑として応じようとしなかった。しかし、今般窮地に立たされたことで、ロシアからのバックアップが得られるのなら、厳しい条件でも呑もうとしているように見える。ベラルーシがロシアに従属する保護国、半独立国に後退するシナリオも、否定しきれない。

その際に、ロシアがベラルーシを支配するツールになるのが、前述の「工程表」である。ただし、三一項目とされるその中身は、明らかにされておらず、九月一四日の会談時にも明らかにならなかった。これまでの両国のやり取りから推測するに、ロシアはベラルーシに、通貨統合、共同の国境管理および税関業務、税制・税率の共通化などの項目を呑ませようとすると考えられる。

連合国家条約では、第三国に対し共通の通商・関税政策を適用することをうたっている。おそらくロシアはベラルーシに、対欧米経済制裁に同調するよう迫るのではないか。この制裁は、対象国からの一部食品の輸入を禁止するものだが、禁止品目がベラルーシを経由してロシアに流入している現実があるだけに、対策が求められていた。また、ロシアは現在ウクライナと全面的な貿易戦争状態にあり、この面でもベラルーシはロシアに歩調を合わせることを迫られる可能性がある。

ベラルーシはロシアに対する政府債務も抱えており、返済能力には疑問符が付く。そこで、ベラルーシの戦略的企業をロシアの国策会社などに身売りするといったシナリオも考えられる。ベラルーシ領の石油パイプラインをロシアのトランスネフチ社に売却するとか、ベラルーシの軍需企業をロシアの国家コーポレーション「ロステック」の傘下に置くといった案が出てきても不思議ではない。

ルカシェンコはこれまで、ロシアによるクリミア編入、ジョージアからの南オセチア、アブハジアの独立を正式に承認することを渋っていた。しかし、この面でもいよいよロシアに追従せざるをえないかもしれない。

軍事面では、これまでベラルーシ領にはロシア軍の利用する小規模な施設こそ置かれていたものの、ルカシェンコはロシア軍の本格的駐留には抵抗してきた。しかし、この面でも譲歩を迫られる可能性があるだろう。

九月一四日の首脳会談こそ表向き平穏に終わったものの、ロシアはいままさに水面下で、ベラルーシの主権に触手を伸ばしているところであろう。●